

高齢者を援助するボランティアの 老いへの準備行動

——地域ボランティア活動による援助成果——

大坂 紘子

要 旨

本研究の課題は、ボランティアがボランティア活動を通して高齢者の抱える問題を目にすることで、自身の生活を変える可能性を調べることにある。この研究は、地域ボランティア46名に対する質問紙調査と5名のインタビューの結果の分析からなっている。本研究の知見は以下の2点である。第1に、高齢者を援助した経験をもつ半数以上のボランティアが、老いへの準備行動をとっていた。加えて、40～50代のボランティアと70～80代のボランティアの準備行動の割合は異なっていた。ボランティアが高齢になるほど、老いへの準備行動をとる割合が高かった。40～50代のボランティアは、老いや死がまだ身近ではないために高齢のボランティアに比べて予防的対処を行う割合が低く、70～80代のボランティアは、援助を受ける高齢者が直面する問題により親和性があるために老いへの準備行動をとる割合が高くなったと考えられる。第2に、ボランティアの中には、ボランティア活動でこうはなりたくないという高齢者に接することで、自分が周囲に助けられたときに感じよく対応しようとする人がいた。高齢者へのボランティア活動を通し、ボランティアは老年期への社会化のための望ましい行動を学習することができ、老年期への円滑な移行が可能になると推定される。

キーワード：地域ボランティア、援助成果、援助行動、中年期、老年期への移行

1. 問題

1.1. ボランティア活動の世代の特徴

日本では、近年、中高年のボランティア活動が盛んに行われている。日本でボランティア活動が普及しはじめたのは第2次世界大戦後とされる [遠藤・土志田 1995:39]。平成19年版国民生活白書によると、日本ではボランティア活動に現在参加している人は約1割、現在参加していないが今後は参加したいとする人は約5割おり [内閣府 2007:86]、ボランティア活動自体が日本に定着しつつあるといえる。

次にボランティア活動の担い手の変遷を述べる。第

2次世界大戦後は学生や若い勤労青年がボランティアの主体であったが、1970年代を境に主婦がボランティアの主力になった [中嶋 1999:13]。現在は主婦と定年退職者が主力となっている [全国社会福祉協議会 2002:8]。

ボランティアの活動領域は地域や福祉であることが多い [全国社会福祉協議会 2002:15]。また、前述のように主婦や定年退職者が活動者の中心である。本研究の研究対象は地域の福祉ボランティアである。ボランティアの中心世代は中年期から老年期であり、これらの人々が老いて他者の援助が必要となった老年期の人々を援助しているという構図をもつ。本研究では、このような世代の特徴に着目して分析する。Levinson

は40歳～60歳を中年期、60歳～65歳を老年への過渡期とし、65歳以上を老年期と定義している [Levinson 訳書 1992:111, Levinson 1996:18]。本研究では中年期を40～50代、60代を中年から老年への移行期、70代以降を老年期とする。また、「老いて他者の援助がないと生活できない状況」への準備行動を「老いへの準備行動」と定義する。

1. 2. 老いへの準備行動

中年期以後を視野に入れた研究は1970年代以降活発になった。長寿化により中年期以後の期間が長くなり、その過ごし方が注目されるようになった。中年期以後の人々が社会活動などの家庭外の役割をもつことは精神的健康につながるという [Moen, Dempster-McClain, & Williams 1992:1632] [西田 2000:53]。

現代では、核家族化の進行により高齢者と同居した経験がない者が増加し、老年期の生活を具体的に知る機会が少なくなっている。Rosowは成人期以後の社会化を、成人としての地位と集団でのメンバーシップにふさわしい新しい価値と行動を教え込む過程であるとしている [Rosow 1974:31]。しかしながら、現代社会では老年期への準備が十分にできているとはいいがたい [Rosow 1974:27]。

大坂は、中高年が高齢者へのボランティア活動を行うことで老年期への移行がスムーズに行く可能性を指摘している [大坂 2008:8]。援助後の援助者に及ぼす心理的効果は援助成果とされ [高木 1997:52]、ボランティア活動の援助成果が大きいほど活動が継続される [妹尾 2003:115]。ボランティア活動は、役割獲得による精神的健康の維持の機能に加え、老年期への具体的な準備行動を学習させ、老年期への適応を促す機能をもつのではないだろうか。本研究の課題は、中年期から高齢者へのボランティア活動を行うことと老年期の具体的な準備行動のつながりを検討することである。

2. 方法

今回、調査の対象としたのは東北地方のある県で活動する「こ～ぶくらしの助け合いの会」のボランティアである。この団体は1985年に、高齢者への援助を目的に発足した（現在では子育て支援や障害者支援もやっている）。ボランティアは2008年度末の時点で844

名（30代3%、40代13%、50代33%、60代39%、70代11%、80代1%）が登録している。2001年度時点では9割以上が女性であった。筆者は1999年からこの団体へのフィールドワークを重ねている。今回の調査では質問紙で大まかなところをとらえながら、個別のインタビューも行った。質問紙は2008年10月～12月、電話による個別のインタビューは2009年3月に実施した。質問紙は選択肢から選ぶ形式と自由記述を組み合わせた。質問項目は、高齢者への援助経験の有無を2件法で尋ね、経験ありのボランティアには活動経験から自身の参考にしようと思ったことがあるか（2件法）、経験から自身の老いへの準備行動をとったことがあるか（2件法）を尋ねた。老いへの準備行動をとったボランティアは内容を自由記述で回答してもらった。自由記述に関しては、質問紙配布時に筆者が口頭で具体例（高齢者宅での整理の仕方を参考に自宅も整理した、といった過去の調査で得られたエピソード）をあげて説明した。その他に基本的属性（現在の年代、活動開始の年代、活動年数、性別）を尋ねた。配布の方法は、ボランティアが集う場で配布し匿名で記入してもらい、その場あるいは郵送で回収した。配布数は67部、うち回収したのは48部だった。今回の分析対象は48部のうち欠損値がある2部を除いた46部である（有効回答率は69%）。電話によるインタビューは、質問紙の回答者のうちインタビューに応じられるとした5名に実施した。5人すべての了承を事前にもらったうえで会話はICレコーダーで録音した。

3. 結果

3.1. ボランティアの属性

46名のうち、女性は44名（96%）、男性は2名（4%）だった。年代は40代3名（7%）、50代17名（37%）、60代16名（35%）、70代9名（20%）、80代1名（2%）だった¹⁾。これらの人々が活動を開始したのは30代2名（4%）、40代11名（24%）、50代20名（43%）、60代12名（26%）、70代1名（2%）だった。活動年数は1年未満が5名（11%）、2～3年が13名（28%）、4～5年が7名（15%）、6～9年が5名（11%）、10～14年が12名（26%）、15～19年が4名（9%）であった。

3. 2. 高齢者への援助経験と将来展望

46名中、入会後に高齢者への援助経験があるボランティアは38名(83%)、ないのは8名(17%)であった。高齢者への援助経験がある38名のうち、援助経験から自身が高齢になった時に参考にしようと思ったことのあるボランティアは36名(95%)、ないのは2名(5%)であった。また、38名のうち、活動で目にした高齢者の生活を参考に自身の老いの準備行動をとったことのあるボランティアは23名(61%)、ないのは15名(39%)だった。高齢者への援助経験があるボランティアはそのほとんどが何らかの参考にしようと思ひ、半数以上が実際に自分自身も準備行動をとっていることがわかる。

3. 3. 現在の年代と準備行動

高齢者への援助経験がある38名について、現在の年代ごとに準備行動の有無とその年代において準備行動ありと回答したボランティアの割合を表した(表1)。40代以下のボランティアでは行動ありが2名中1名(50%)、50代は14名中6名(43%)、60代は13名中8名(62%)、70代以上は9名中8名(89%)だった。40代から60代で50%前後が行動ありと回答し、70代以上では9割近くが行動ありと回答している。

同じ回答を、活動を開始した年代ごとの準備行動の有無からみた(表2)。40代以下では行動ありは12名中6名(50%)、50代は16名中8名(50%)、60代は9名中8名(89%)、70代は1名中1名(100%)であった。

表1 現在の年代別のボランティアの準備行動の有無と行動ありの割合

現在の年代	行動あり	行動なし	行動ありの割合
40代	1	1	50%
50代	6	8	43%
60代	8	5	62%
70代～	8	1	89%

表2 活動を開始した年代別のボランティアの準備行動の有無と行動ありの割合

活動開始年代	行動あり	行動なし	行動ありの割合
～40代	6	6	50%
50代	8	8	50%
60代	8	1	89%
70代～	1	0	100%

50代以前に活動を開始したボランティアは半数が、60代以降に活動を開始した場合にはほとんどのボランティアが準備行動ありと回答している。

3. 4. 準備行動の具体的な内容

具体的な準備行動は23名中22名で記載があった(具体的な記述は以下に「」で示した。()は筆者が補足した)。身の周りの整理は各世代で共通に言及されていた(22名中17名が言及、内訳は50代以下6名、60代6名(うち男性1名)、70代以上5名(うち男性1名))。記述例としては「(自宅で)思い切って使用していない物を捨て、すっきりさせました。(中略)身の回りはすっきりさせておかないとキケン! これは誰でもわかっていることだと思いますが、実際に(活動で)目の当たりにすると実感です」(50代女性)、「歩くところがいないお宅にうかがった時は、(その後)自宅をがんばって片づけました」(60代女性)などがある。

世代ごとに老いへの準備行動に違いはあるのだろうか。表3に身の周りの整理以外の自由記述を現在の年代ごとに分けて示した(プライバシーの保護のため、文の大意を損ねない範囲で一部省略や変更を行った箇所がある)。世代ごとの特徴は以下の通りである。50代では家の購入時に将来の加齢を考慮するという将来展望をふまえた予防介入的な記述がみられた。60代以降は現状維持の大切さに触れた記述がみられはじめた。例えば、60代に入ると「メリハリのある毎日」を続けるといった記述があらわれ、70代以降は、認知症に関する記述や、なるべく社会参加することが老いへの対策と考えている記述があらわれた。また、自分が援助を受けた際の対応も60代以降の記述にみられた。

準備行動はとっていないとしたボランティアは「今心配していますが、具体的にどうしたらよいかまだ考えてません」(50代女性)といった記述がある一方、「学ぶことが多く(私も老いていくわけですから)参考にさせていただきたい方がいます」(50代女性)との記述がみられ、現在準備行動をとっていないボランティアでも、活動を通し自身の将来を意識している場合があることがうかがえた。

3. 5. 事例

次に自由記述の理解を深めるために行った個別の電話インタビュー結果を示す。対象者は質問紙回答時にインタビュー可と回答したボランティア5名である

表3 年代別の老いの準備行動に関する自由記述

50代以下	<ul style="list-style-type: none"> ・老いても、足腰を鍛えることで、長寿を目指して、自分も運動をするようになった。人間関係を良好に広げていく。いざ、困った時に手助けしてくれる友人をつくる [50代女性] ・高齢になると、草取り、雪かき等の依頼が多く大変ということが分かり、マンションに引っ越しました（生活に合わせたマンション買った） [50代女性] ・家を建てる時にバリアフリー [50代女性]
60代	<ul style="list-style-type: none"> ・①人との交流を築いておくこと ②趣味を多く持ち、ストレスを蓄積しない ③適度な運動、旅行などをして健康に留意する ④近所付き合いを密にする ⑤笑顔のある生活を心がける [60代女性] ・健康でいつまでもいられる様に歩くこと、新しいことに挑戦する、近所に友達を作る、食事は自分で買い物し作る、メリハリのある毎日、生活を送ることに心掛けています [60代女性] ・自分がなくなった時のために子どもたちに預貯金、保険、土地、墓地の事等を書き渡す [60代女性] ・家族だけでなく、いろんな場面で力を貸して下さった方には、素直に「ありがとう」を言う、伝える。緊急連絡先を書きとめる。大事な書類をまとめてわかりやすくしておく [60代女性] ・2度入院している私が入院したとき、身体が動ければ自分で入院の用意はできるが、いつ倒れるか分からないし主人もどこに何があるか分からないから、一通り準備しておく。時々点検する。主人、子どもたちにここに置いてあると教えておく [60代女性] ・春夏秋冬に合わせて、季節の飾り物を飾ってありました。忙しさにかまけて、飾らない時があるが、なるべく季節感を [自分の家でも出したいと思いやった]……。人を使用人みたいに使う人、杖を使って命令したり、あんな人には絶対ならない……。できるだけここに。精神的な面で反面教師ですね [60代女性] ・家族に物の置いてある場所を知らせた [60代男性]
70代以上	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症予防、転倒防止などに努めて心をくばっております [70代女性] ・自分も74歳です。まだ足腰など痛くて、通院しながらも活動しております。皆歳を取れば痛いのは同様です。でもあと1年くらいは活動します。出来る限りですけどね [70代女性] ・足、腰から弱ってきますので、ストレッチ、体操、市の教室があればなるべく参加しております。ない時は近所の公園を3周して、歩くようにしております。何でも集会には、出るようにしております [70代女性] ・入院時に使用する下着、タオル、パジャマ等袋に入れて用意する。認知症にならない限りかわいい年寄りになる [70代女性] ・援助していただいた方に感謝すること。台所とか風呂トイレなど水回りを住みよい様に80歳になってから改善した [80代女性] ・①後世への伝え難い事柄の選別。家族にも知られたくない物の抹消。他の人に価値判断してもらえない、自分だけの宝物の保存方法、等々一杯あるが、生きてる時には出来ないものですね。②長寿は本当に幸せなのか？ 姥捨山を思い出される事例に、出会う事が多い。じゃ、どうすればいいのか、只今思案中 [70代男性]

注) 表の記述はインタビューに応じてもらったボランティアの自由記述を含む。なお、[] 内は筆者の補足である。

(なお、5名中1名は活動年数4年、4名が10年以上であり、活動年数が長い回答者が中心だった)²⁾。

・50代女性 (活動経験あり、準備行動なし)

入会して約4年で30件位の援助を行ったと思う。最初の活動は病院の入院患者への週1回の洗濯だった。総合病院が自宅近くにあり病院関係の活動は多い。高齢男性宅で妻の入院中に週2回食事作りをしたこともある。入会后、自分自身も倒れたり病気になりうること、その際どこに助けを求めればよいのかがわかってきた。また、この病気はどういう風に進行していくか、どの病院はどのような病気に強いのかといったことがわかるようになった。自分自身の老い支度にはまだつながっていないが、入会后に親の調子が悪くなり介護が必要になったことがあった。その際活動経験があったので戸惑わず対処でき、介護保険を受ける際にケアマネージャーとスムーズに話ができた。

この事例では、活動により老いた場合の展望が明確

になった。また、介護が必要になった親への対応がスムーズになった。

・50代女性 (活動経験あり、準備行動あり)

入会して約10年で100件以上活動していると思う。初めての援助は高齢者が高齢者を介護するいわゆる老老介護の家での掃除だった。その後、寝たきりの高齢女性宅で昼の食事作り、掃除、洗濯を行ったり、高齢の姉を高齢の弟が介護する家で買物と食事作りをやったりした。今は1週間に4、5件活動している。足腰が弱くなった高齢者宅の掃除とゴミ出し、1人暮らしの高齢者宅での掃除、押し入れや衣類の整理などである。ホームヘルパーがしないところを中心に掃除や整理をしたりする。活動をはじめてから、ホームヘルパーを頼んでもやってもらえるところは限定されているといった介護保険の特徴もわかったし、2世帯で同居していても普段のコミュニケーションが円滑でなければ日常の掃除などをやってもらえない家もあること

もわかった。活動を通し、自分の老後をどうすればいいかみえてきたと思う。自分が元気なうちに衣類やクローゼットの整理を行わないと歳をとると大変だということがわかったので、自宅でもいらぬ物を整理しはじめた。

この事例は、活動により老後に必要な準備行動が明確になり、実際に物の整理といった行動に移した。

・60代女性（活動経験あり、準備行動あり）

入会して10年以上になる。今までに関わった人は何十人もおり、正確な人数はわからない。最初の援助は独居の高齢女性宅での食事作りや洗濯、掃除だった。そこには現役時代の仕事の弟子もよく顔をみせていた。この頃の自分は50代だったので老い支度をするということにはなかったが、みていて素敵な生き方だと思った。癌になって在宅で終末期を迎え、亡くなる2週間前まで自宅にいた人も印象に残っている。そこでは掃除や料理、話し相手をしてきた。長い活動の中で、自分が倒れたり病気になった時の覚悟ができ、準備がとりやすくなった。老後を生き生きと過ごすには趣味も含めて今までやってきたことを続けることが大切とわかった。今は趣味を大切にしつつ身の回りの整理をはじめている。自分では全てを処分しきれないので、子どもに処分してかまわないといっている。

この事例は、活動を通じ、不慮のことがあった場合の心構えが生じ、実際に老いへの準備行動をはじめた。また、子どもとコミュニケーションをとり、自身の死後に遺族が困らないような行動もとっている。

・70代女性（活動経験あり、準備行動あり）

入会して10年以上になる。これまでの援助件数は30件を超している。初めての援助は脳腫瘍で入院後、退院してきた高齢者宅の掃除だった。その人は最終的にホスピスに入ったが、病気が重くてもこちらに明るく接してくれ、その人の子どもたちもその人の面倒をよくみていて、感心した。今までにいいなと思ったのはある高齢の1人暮らしの女性である。図書館から郵送で本を借りるなど物を必要以上に増やさず、すだれの取り外しなどの季節の準備もきちんとしていた。反対に、高齢の女性で、物が捨てられず階段にも物が置かれて半分ふさがれているところもあった。入会前は、身体を悪くした人が身近におらず、歳をとるとどうなるかよくわからなかった。入会后、何が困るか具体的にみえてきた。いい、悪い、双方の高齢者をボランティア活動でみたことで、とても勉強になった。部屋

に物があふれている家に援助に行ったことで、物を減らして最低限にしようと感じ、実際に整理をはじめた。ボランティアにものを頼む際に感じが悪い高齢者もいた。例えば頼まれたことを全部し終えても、障子が破れた部屋の窓ガラス拭きや高く積まれた書類の下を拭くといった意味のない仕事をわざと頼んできて“こんな簡単な仕事は昔の自分はさっさとしていた”といわれたりした。自分ではそういう依頼のしかたはしないようにしたいと思っている。

この事例は、活動によって自身がこうありたいという高齢者像が明確になり、物の整理といった準備行動をとりはじめた。また、人への依頼のしかたを工夫するようになった。

・70代男性（活動経験あり、準備行動あり）

活動をはじめて10年以上で、これまでの活動は100件を超した。最初の活動は地震対策のガラス戸へのフィルム貼りだった。目が見えない高齢者への本読み、戸の建付けの修理、物置の整理、錠前の修理などを行ってきた。今は草取りの依頼も多い。活動をしている中で、こういう高齢者になりたいと思う人もいたし、こういう高齢者になりたくないという人もいた。ある高齢女性宅での草取りの際、その人は物腰が柔らかく指示も的確で、気持ちよく活動できた。反対に、ある高齢者への音読中、特殊な単語をすぐに読めないと相手にしばしば“今まで何勉強してきたんだ”と高圧的にいわれた。子どもや親せきがいっても顔をみせないために孤立する高齢者も目にした。ある高齢者は確定申告を手伝ってくれと銀行の通帳まで出して何度も頼んできて、断るのが大変だった。また、人が亡くなると遺族が書類の整理に困ることもわかった。ある高齢者は妻が急死し、妻に全てまかせきりだったために妻の年金手帳や通帳を探すのに非常に苦労していた。それらを参考に、自分が元気なうちに身の回りを整理したり、子どもと普段からコミュニケーションをとるといった準備をしている。

この事例でも、援助経験を通じ自身の目指す高齢者像が明確になった。物の整理や子どもとコミュニケーションをとって孤独を防ぐといった具体的な行動もとっている。

4. 考察と課題

4.1. 老いへの準備行動

現代は長寿社会となったが、老年期をスムーズに迎える準備ができているとはいいがたい。質問紙調査では、高齢者への援助経験があるボランティアのほとんどが自身の参考にしようと思ったことがあった（38名中36名、95%）。ボランティアへのインタビューでも、自身が倒れたり病気になった場合のイメージが具体的になったとしている。活動を行うことで、老年期の具体的展望を描きやすくなっている。

実際に老いへの準備にとりかかるボランティアも少なからずみられた。質問紙調査では、高齢者への援助経験があるボランティアの半数以上が老いへの準備行動をとっていた（38名中23名、61%）。自由記述では、身辺の整理が各世代で共通にあげられていた。インタビューでも援助経験を自身の老いへの準備行動に生かしたボランティアがいた。活動で実際の高齢者の生活を目にする事で何が老いへの準備になるか理解しやすくなり、準備行動につながるといえる。また、男性の回答者は少なかったものの、身辺の整理など女性と共通する事項があげられた。性差に関係なく、高齢者へのボランティア活動を自身の老いへの準備行動に生かすことが示唆される。

ボランティア自身が老年期に入るほど、社会との接点が減り、周囲から援助を受ける機会が増加していく。自由記述では、「力を貸して下さった方には、素直に『ありがとう』を言う、伝える」といった、援助してくれた相手に感じよく接する大切さを高齢者から学んだとする記述が複数みられた。ボランティア活動により老年期の望ましい行動を習得し、周囲からの援助を上手に受けとれる行動をとりやすくなるといえる。ボランティア活動を通し、Rosowが指摘するような老年期への社会化過程における行動の習得が生じているとも考えられる。これがボランティア活動に限らず高齢者とのふれあいで生じるのかどうかは今回の結果からは弁別できない。しかしながら、身近に高齢者がいないボランティアにとっては老いを学ぶ機会をボランティア活動が与えてくれたといえよう。

4.2. ボランティア活動の世代の特徴

年代と老いへの準備行動に関連した特徴は以下の通りである。表1からは、50代を除いて半数以上のボランティアが準備行動をとり、高齢になるほど準備行動をとる割合が高い傾向が示された（40～50代は16名中7名、60代は13名中8名、70代以上は9名中8名）。40～50代のボランティアは高齢のボランティアに比べ老いや死が身近でないため準備行動をとる割合が低く、70代以上のボランティアは高齢者の抱える老いや死の問題が身近なため準備行動をとる割合がより高くなると考えられる。また、60代以降に活動を開始した場合、ほとんどのボランティアが老いへの準備行動をとっていたことが表2で示された（60代以上の10名中9名、90%）。同世代でもライフイベント経験（自身や家族、親の病気や介護、死など）の違いによって年代でひとくくりにはできない個別のきっかけや段階がありうることは考慮する必要はあるが、入会時に老いが身近に感じられる年代では当初から積極的に準備行動をとり、感じにくい年代は徐々に準備行動をとりはじめるといった違いが生じる可能性がある。

表3の記述では、歳をとっている者の多くが心がけていると思われる行動の記述がみられた（認知症予防、転倒防止に気を配る、ストレッチや体操をする、など）。高齢になるほど準備行動をとる割合が高い傾向（表1、表2）に関しては、高齢になるほど準備行動をとるという年齢の効果である可能性もある。一方で、ボランティア活動がそのような準備行動を実際に開始するきっかけとなったとも考えられる。

4.3. 今後の課題

以上を踏まえて、以下の3点が今後の研究課題となる。第1に、高齢者への援助経験がない者を対象とした調査を実施し、今回の調査結果と比較する必要がある。今回みられた老いへの準備行動が、年齢の効果なのか、あるいはボランティア活動独自の効果なのかを弁別するためである。

第2には、ボランティア活動による老年期の行動の習得過程を質的に検討することがあげられる。具体的な援助経験がボランティア自身のどのような老いへの準備行動へつながったかを精査することで、現代人が老年期へとスムーズに移行するためのヒントが浮かぶ可能性がある。

第3に、ボランティア自身の親の介護といったライ

イベントとの関わりを視野に入れて研究を進める必要があるだろう。今回の調査では援助経験を親への関わりに生かしたとする事例が存在した。反対に親の介護経験から自身の老いへの準備行動が進んだり、ボランティアへ動機づけられることもありうるだろう。個別のライフイベントを変数として組み入れることで、老いへの準備行動にかかわる要因をより正確に分析できると考える。

〈注〉

- 1) 百分率は小数点第1位で四捨五入して、整数位までを表示している。そのため、合計が100%にならない時がある。
- 2) 今回の事例は方法で述べたように質問紙回答者の中でインタビューに協力するとした人であり、5名中4名が10年以上活動し、うち3名が60代以上である。助け合いの会の1998年度末の時点のボランティア(1001名)の年代内訳は20代2%、30代8%、40代24%、50代35%、60代24%、70代6%、80代1%であり、方法で記した2008年度末は、それと比べると30代は5%減、40代は11%減、50代は2%減、60代は15%増、70代は5%増となっている。全国社会福祉協議会のボランティア調査では、ボランティア全体のうち活動年数10年以上の者は43.7%で、ボランティアの活動長期化や新規参入者・活動年数の浅い者の減少が指摘されている[全国社会福祉協議会 2002:14]。今回の事例が今回の質問紙回答者や助け合いの会の全体傾向を厳密に反映しているとはいえないが、助け合いの会で長期に活動するボランティアの傾向をある程度反映していると推定する。

〈引用文献〉

- 遠藤興一・土志田祐子 1995 「文化的特質としてのボランティア活動」『明治学院論集社会学社会福祉研究』第97号:31-89 明治学院大学
- Levinson, D. J. 1978 *The Seasons of a Man's Life*, Alfred A. Knopf, (南博訳 1992 『ライフサイクルの心理学(上)』講談社)
- Levinson, D. J. 1996 *The Seasons of a Woman's Life*, Alfred A. Knopf.
- Moen, P., Dempster-McClain, D., & Williams, R. M., Jr. 1992 "Successful aging; A life course perspective on women's multiple roles and health" *American Journal of*

Sociology, 97:1612-1638

- 内閣府 2007 『平成19年版国民生活白書』時事画報社
- 中嶋充洋 1999 『ボランティア論 共生の社会づくりをめざして』中央法規出版
- 西田由紀子 2000 「成人女性の多様なライフスタイルと心理的well-beingに関する研究」『教育心理学研究』第48巻4号 433-443 日本教育心理学会
- 大坂紘子 2008 「中高年女性のボランティア開始後のライフコースとネガティブ・イベントへの対処」『社会心理学研究』第24巻1号 1-10 日本社会心理学会
- Rosow, I. 1974 *Socialization to Old Age*, University of California Press.
- 妹尾香織 2003 「援助行動経験が援助者自身に与える効果:地域で活動するボランティアに見られる援助成果」『社会心理学研究』第18巻2号 106-118
- 高木修 1998 『人を助ける心:援助行動の社会心理学』サイエンス社
- 全国社会福祉協議会 2002 『全国ボランティア活動実態報告書』全国社会福祉協議会

〈謝辞〉 調査に協力していただいた「こ〜ぷくらの助け合いの会」の方々に厚くお礼を申し上げます。また、本研究に関して加藤道代先生(東北大学)、辻本昌弘先生(東北大学)から貴重な助言を頂きました。感謝の意をここに表します。

(おおさか・ひろこ 東北大学大学院文学研究科
心理学研究室 客員研究員)